



スペシャルインタビュー

Vol.11

廣瀬 順子 さん

視覚障がい者柔道女子57kg級選手

2020年東京パラリンピックを、障がい者への理解を深めるきっかけに

大学1年の5月に膠原病の一種である成人スティル病を発症した廣瀬順子さん。その後の合併症で視力は低下しましたが、6年後に開催されたリオデジャネイロパラリンピックで、日本人女子柔道初の銅メダルを獲得しました。2020年東京パラリンピックに向けた思いを語っていただきました。

そんな時に、大学の先輩から障がい者スポーツであるゴルフボールのボランテェアに誘われました。そこで、私がゴルフボールの先生に柔道をやりたいと相談したところ、「日本視覚障害者柔道連盟」の先生に連絡してくださいと、視覚障がい者柔道に出合うことができました。

高校時代、厳しい練習をしてきた柔道ならば続けられるだろうと思っていたのですが、3年以上のブランクがあったので初めはすごく苦しくて、「やっぱり柔道ってしんどいな」と思いました。

しかし、同じ柔道でも、視覚障がい者柔道はまったく別の競技でした。高校まで練習していた柔道は、組み手争いが重要な駆け引きで、いかにして有利な所をつかむか、そして技をかけるタイミングや駆け引きで勝敗が決まりました。ところが、視覚障がい者柔道は、組手の状態から始まります。お互いに優位な所をつかんでいる状態なので、相手の崩し方や技の掛け方がわからなくて戸惑い、初めはなかなか勝てませんでした。

それでも、地道な努力を続けていたら、全国大会に出場できて、柔道を愉しみながらも真剣に打ち込めるようになりました。

2020年 東京パラリンピックを視野に

大学卒業時、「柔道でうちの会社に入



第32回全日本視覚障害者柔道大会(2017年)の様子 提供:日本視覚障害者柔道連盟

りませんか?』と、ある企業から声をかけていただき、仕事と柔道を両立させる中で、少しずつパラリンピックや世界大会を意識するようになりました

その後、2015年12月に結婚し、同時に現在の会社に転職しました。それまでは、高校生の頃のように厳しい練習を自分に課していましたが、夫から『思い詰めて練習するよりも、もつと愉しんだほうが強くなれるよ』と、アドバイスをもらい、それからは柔道をもつと愉しめるようになりました。

その頃から、パラリンピックに出場して勝ちたいと思うようになりました。世界で戦っても力負けしない体をつくるために、筋力トレーニングに励みました。技が

難病を克服し、命の尊さを体験

小学5年の時に、漫画の影響を受けて柔道を始めました。全国大会に出るのが夢で、高校1年でインターハイ女子柔道78kg級に出場しました。でも、個人的には『インターハイに出ました』と、胸を張って言える成績を残せませんでした。

高校での柔道部の練習は厳しかったの上手くても力で負けていたら、技に入る態勢になれないからです。視覚障がい者柔道は、健常者と同じ体重別で勝敗が決まります。さらに、視障がいの程度により、B1・B2・B3とランクで分けられたポイントが加味され、世界ランキングが決まります。本来、パラリンピックに出場できるのは階級ごとに世界7位までですが、2020年東京パラリンピックでは開催国として各階級1人ずつ出場できます。そのためには国内大会で優勝し、連盟が指定する国際大会で成績を残すことが条件です。

パラリンピックで伝えたいこと

障がい者アスリートを雇用してくれる企業が増えてきて、様々な企業が障がい者スポーツを支援してくださり、大学などが練習の場所を提供してくれるようになりました。そういう意味では、障がい者アスリートを取り巻く日本の環境は各段に向上したと感じています。

「障がい者との共生、障がい者への理解を深めましょう」という機運が高まっていますが、2020年以降も、その動向を継続してほしいと願っています。世界に目を向けた時、バリアフリーの整備が進んでいない国や地域がたくさんありますが、海外で感じる不便な場所も困っていても、皆さんが近くに来て助けてくれます。でも、残念ながら日本では互いに距離を持つ

ですが、オリンピックや世界大会を意識したことはありません。高校卒業後は、理学療法士をめざして広島国際大学へ進学し、引き続き柔道部に所属しました。大学1年の5月に、膠原病(こうげんびょう)の一種である成人スティル病を発症し、治療に専念するために入学したばかりの大学を退学しました。発病直後は、この先どうなるのかと不安になり、泣いてばかりいましたね。半年間の入院治療で成人スティル病は回復しましたが、合併症の影響で視力が低下しました。病院の先生から、成人スティル病が治れば視力も回復すると言われていましたが、命の危機を乗り越えた時には、視力が低下してしまっただけで、命があることに感謝しました。生きていくことに喜びを感じ、これからできることをもつと愉しもうと考えるようになっていました。

視覚障がい者柔道との出会い

退院後、社会福祉士の資格を取りたいと考え、京都の花園大学へ進学しました。退院の時に決心したように大学生活を愉しもうと思いい、友人と遊びに出掛けるなど、自分なりに有意義な時間を過ごしていました。しかし、視力が低下したことで、友人たちと同じようにできないことが多く、障がいを持ったことを実感し、これから何か一生懸命になれるものはないか、それは柔道なのかなと考える毎日でした。

て接しているように感じる人が多いです。施設面ではバリアフリーが進んでも、人と人の心のバリアフリーは海外よりも遅れているように感じています。

皆さんが互いに歩み寄り、誰にでも手を差し伸べ助け合える社会。2020年東京パラリンピックをきっかけに、障がい者への理解が進み、心と心がつながる真のバリアフリーが実現してほしいと願っています。日本の皆さんからの応援に応えるために金メダル獲得をめざし、日々練習に励んでいます。ぜひ、応援してください。

Junko Hirose

1990年生まれ、山口県出身。伊藤忠丸紅鉄鋼所属。視覚障害者柔道B2クラス女子57kg級。小学5年で柔道を始め、高校1年生の時に女子柔道78kg級でインターハイに出場。大学時代に病気の合併症で視力が低下。2016年、リオデジャネイロパラリンピックで、パラリンピック柔道女子日本初の銅メダルを獲得。2018年4月には、ワールドカップで金メダル、11月には世界選手権で銀メダルに輝いた。夫である廣瀬悠選手と共に2020年東京パラリンピック出場をめざし、日々練習を重ねている。